

【地域活動ノート】

出張！おくすり実験教室

——コミュニケーション体験演習における薬学科4年次生が行う小学生への薬学啓発活動——

村田勇*・北岡諭*・宮本嘉明**

活動の概要

城西大学薬学部薬学科では、生活者の多様な考え方を理解したうえで、地域社会に貢献できるような学生教育を実施し、薬剤師として求められる基本的な資質を醸成している。4年次には、それまでに修得した薬学的知識、技能、態度を統合するためにプロジェクト基盤型学習（PBL）活動を実施している。このPBL活動のひとつとして、大学近隣の小学6年生に対して医薬品の適正使用を啓発する「出張！おくすり実験教室」がある。本稿は、大学生が小学生に対する薬学リテラシー教育への関わりを報告する。

キーワード：コミュニケーション能力、相互学習、大学生、小学生、薬学啓発活動、毛呂山町

城西大学薬学部薬学科は、1～3年次に修得してきた薬学的知識・技能・態度を統合するために、4年次の必修科目としてコミュニケーション体験演習（PBL活動）を実施し、生活者の多様な考え方を理解したうえで、地域社会に貢献できるようになることを目指している。本科目において、2023から2025年の3年間、延べ80名の大学生が、本学近隣の小学生（6年生、220名）に対して「くすりの正しい使い方」や「くすりを使った実験」、「オーバードーズの危険性」などを小学生が体験しながら薬学リテラシーを伸ばす啓発活動を行った（図1）。このような地域に関わる相互学習の実践は、地域連携による人材育成に重要な役割を持っている。



図1 おくすり実験教室のチラシと教室の様子

* 城西大学薬学部薬学科助教

** 城西大学薬学部薬学科教授



図2 オーバードーズは危険がいっぱい



図3 ジュースで飲むと効果がなくなる



図4 水でスルンと飲むことができるよ



図5 薬学啓発のための授業の様子

子どもが大人と同じ量のくすりを飲むとどうなる？

大学生たちは、小学生にも分かりやすいように「大人と子どもの体の大きさの違いを大小のコップで表現し、同じ量のくすりを溶す」ことによって実験した。小学生からは「色の濃さが違う」などの声が多くあがり、子どもが大人の量を飲む（オーバードーズ）と危険であることを体験した（図2）。

くすりと飲み物に相性はあるの？

大学生たちは、飲み合わせの大切さを体験してもらうために、水、お茶、オレンジジュースなどにくすりを入れるとどのように反応するのかを、視覚的な要素を考えて実験を考案した。小学生は、組み合わせによって大量の泡が発生したり、くすりの色がなくなったりして、驚きを隠せない様子だった（図3）。

くすりを飲むときの水の量は大切？

くすりには沢山の材質や剤形があります。特に、カプセルは水の有無によって、のどに引っかかることがある。小学生は、手の濡れ具合によってカプセルが指に着くのか着かないのか実験し、適量の水で服用する大切さを体験した。また、噛み砕いて飲むではいけないことも実験を通して学んだ（図4）。

授業によって学ぶ「くすりの正しい使い方」

薬物乱用防止講習会では、体験教室の内容に絡めながらオーバードーズの危険性を学習した。小学生は、「学んだことを周りの人に教えたい」「くすりに詳しくなりたい」など肯定的な感想が得られた。つまり、この活動は、小学生の薬学リテラシーを伸ばすことができた（図5）。

この活動は、大学生が薬剤師として社会に貢献するために必要なりテラシーやコミュニケーション能力が向上し、小学生の薬学リテラシーも高め、相互に学習できることを明らかにした。今後、この活動は新たな小学校・中学校でも開催予定であり、大学の地域貢献を促す予定である。

最後に、本活動にご支援を頂きました対象地区の教育委員会ならびにNPO法人医薬品適正使用推進機構に感謝を申し上げます。